

## 五十男の留学は英吉利

吉 家 哲 夫

はじめに

本稿は、1999年度別府大学公開講座「国際文化論」“旅—非日常への時空間”をメインテーマとする、一連の講演のひとつとして準備したものです。不慣れなためだいたい語り残しがありましたので、この会報に掲載の機会を得て感謝しております。

〔講演〕

今日のタイトルですが、私としては精一杯恰好をつけました。「五十男」で、私が、1994年の留学当時は大学の教師ではなく、何のバックもない50半ばの一個人であったことを表わした積もりで、「英吉利」は態々片仮名を避けました。学外から出席の皆さんは別として、学生諸君はこの「英吉利」、読めましたか？「何だこれ？」と思ってくれたら、狙いは成功。少なくともタイトルはcalled attentionと言えるのですから。(時々簡単な英語が入るのはお許し下さい。)それと、「留学」という言葉の意味も人さまさまの解釈がありますから、今日の私の話を聞いて「留学」とは大袈裟とを感じる人がいるかも知れません。それも承知の上で、話を始めさせて頂きます。

私は1993年12月末でサラリーマンを辞めました。断わっておきますが、クビになった訳ではありません。30年と9ヶ月勤めたのです。もうこの辺で何か別の人生を歩み始めるのも良いのではないかと思います。学外からの方の中に

永くサラリーマンをした方が居れば、私の当時の気持ちを細かく語らずとも分かって頂けるのではないかと思います。

会社を辞めて2、3ヶ月はあっという間でした。その間何をしようかと考えて居るうちに、一度英語国に住んでみようかと思ひ当たりました。私は東京外国語大学の英米科(当時)を出て、会社では海外関係の仕事に従事し、仕事の為にヨーロッパ、アメリカ、東南アジア、南米と何回となく海外出張を繰り返していたのに海外に駐在したことはなかったのです。

しかし、ただ住みたいというだけではビザの問題でその国に長く滞在出来ないことは皆さんもご承知の通りです。それに、単なる観光などで一年を過ごせるとはとても思えませんでした。それでいっそのこと大学に入ってやろうと決めた訳です。そうすれば、英語国に住みながら、英語力のアップも図れるので一挙兩得です。

さて、次はどの国へ行くかです。英語国と言っても多いですね。結局自分がサラリーマン時代によく行って予備知識のある英、米から英国を選びました。理由は二つです。私の時代の英語教育は大体Queen's Englishであった為、何となくイギリス英語の方に親しみがあり、また英国の方が銃で撃たれるなどの不慮の事故に遭う確率が少ないであろうということ。いい年をして所謂、犬死だけは御免だと思ったのです。

英国の何処に住むのか？何年も住むのなら兎

も角、一応一年とするなら首都ロンドンですね？こうして、英国ロンドンの大学に入るのだ、という所まで決まりました。これ以上は自分だけでは駄目です。情報収集が必要です。

東京の飯田橋にBritish Council という所があります。これは英国大使館の機能の一部が独立した様な機関で、小規模な図書館か資料センターのようなものです。ここで留学に必要な殆ど全ての情報が入手出来ます。

九州では福岡にこれの出先が1997年に開設されました。福岡の初代の代表はR. コーウィンという人で最初留学生として来日し、二度めに国際交流プログラムで長崎県庁へ入って、一年半の任期が終ろうとする時に、タイミング良くCouncil の開設となったのだそうです。この人も日本が好きな様です。

多くの外国人が日本鼠蹩になるのは不思議ではありません。先ず日本は世界でも希に見る安全な国（今でも）ですし、どの国からやって来ても自分の国より清潔で、生活水準 Quality of Life も高い。更に、極く普通の人でも外国人というだけ、もっと正確には白人というだけで大事にされる、女の子にはもてる、で言う事なしです。

人から聞いた話ですが、大分への飛行機で日本人の乗客には無愛想だった flight attendant が近くに乗合わせた白人には信じられない程親切で、「こちらの座席の方が景色が良いのでお移りになりませんか？」と日本語でお愛想を言っていたと腹を立てていました。もし皆さんがこういう場面に出くわしたらどう感じますか？覚えておきましょう、日本人がこのような好待遇を外国で与えられることは絶対にはないのです。

「清潔」で思い出したのが Denmark の Copenhagen です。私は勝手に綺麗な街に違

ないと想像していました。イギリスからの移動日が丁度日曜日に当たっていたので、あの人魚の像を見ようと十分に厚着をして出掛けました。ところが路上には犬の糞がごろごろ。その上、場所が悪い。レストランの入り口の真ん前、止めてある自動車のドアの真下、といった具合です。デンマークは人の体も大きい、犬の排泄物も大盛りでした。それとは反対に人魚の像は意外と小振りでした。注意して探さないと通り過ぎてしまいます。時期は9月の中旬でしたが、人魚像のある港は既に流水で一杯、ホテルの近くの湖も全面氷で鳥が散歩していました。

さて British Council では留学情報を求めて訪れる人に留学目的を入り口で書かせます。私は咄嗟に「江戸時代における日英交流史」などと書き込んでしまいました。でも何も爾後の拘束はありませんから大丈夫。結局ここには3回通いました。

大学は University of London としました。この大学は35もの colleges から成り立っていて、その中から Goldsmiths College を選びました。“Oxbridge” はとても敷居が高く、考慮にも入れませんでした。勿論 Oxford も Cambridge もロンドンにはないのですが。

Application には教師二人の Recommendation Letter と IELTS (International English Language Testing System) という英語能力テストの証明書、それに大学の卒業証明書が必要でした。推薦状については卒業後30年以上経っていることを理由に勘弁して貰いました。卒業証明書は30年以上経ってもちゃんと母校から貰うことが出来ました。

さて、IELTS です。私は33才の時に既に英検の一級と通訳案内業の資格を取っていました。TOEFL とか TOEIC についても、その存在は知っていました。然し、IELTS は知りませんでした。

た。このテストは前述のBritish Council で受験出来、成績は Band 9から1までで出されます。4技能を夫々に評価して平均点で出します。私は Band 7でした。この成績は Goldsmiths の要求する英語能力の条件を満たしていました。

この試験で慌てたのは、問題用紙がプラスチックのカバーでシールされていて、アンダーラインや書き込みが一切出来なかったことです。スピーキングはイギリス人と10分間位会話をしました。受験料の2万円は今思っても高いですね。

5月10日に願書を発信して、入学許可書は6月17日に到着しました。大学の案内には4週間で回答するようになっていましたが、それより大分時間が掛かりました。自分は色々な点で例外的な志願者と思っていたので、実際に許可書を受け取るまでちょっと心配でした。

受講する科目は次の様に決まりました。

Course units :

Britain and Industrialization	Full Year	10 credits
Introduction to Politics	Full Year	10 credits
English Language Proficiency	Aut/Sp	8 credits
Introduction to Social Anthropology	Spring	4 credits

授業料は年間5,750ポンド（当時のレートで92万円）、寮費4,200ポンド（67万円）でした。

ロンドンには9月18日に出発することに決めました。飛行機はちょっと張り込んで Virgin Atlantic のMid Class にしました。航空券を買った序でにホテルは以前に泊まったことのある Strand Palace を予約して貰いました。サラリーマン時代、会社の役員と行った時は、Harrods の近くの Hyatt Carlton Tower に泊まったことありますが、自前ではそんな贅沢は出来ません。

次に immigration の際に必要とされる Account Balance Confirmation を用意する為に、

虎ノ門にある City Corp. の支店にポンド建ての口座を開設しました。イギリス国内で働かずに勉強出来るだけの預金があることを証明しないといけないのです。

もうひとつ、出発前にしたことがありました。TOEIC を受験したのです。そのうち、そのうちと思いながら終にサラリーマン時代に受けずじまいだったからです。この試験はなかなか疲れました。問題量の多さと進行の速さに驚きました。後日送られて来た成績は870点でした。満点は990点です。このテストは一回に約4万人が受験します。870点はその上位3.5%に入ると Official Score Certificate に記されていました。因に、翌年帰国後に留学の成果を計る為にもう一度受けてみたら、今度は900点で、これは上位2%に入る得点でした。

最近の傾向として顕著なのは Reading より Listening に強い人が多いことです。Listening の部で470点以上が1,523人もいるのに、Reading の部の470点以上はたった142人しかいないのです。私の場合は普通と反対で、Readingの方は470点で上位142人に入るのに Listening では430点で上位1,523人からも洩れてしまいます。

Reading より Listening の方に強い人が増えていることは、コミュニケーション重視の観点からはいい傾向と思いますが、学問の分野で仕事をする人は Reading の方が寧ろ重要ではないでしょうか。

さて愈々出発です。妻と子ども二人に見送られ成田から Heathrow 空港へ飛びました。12時間位掛かりますね。ホテルまでは彼の有名な「ロンドン・タクシー」に乗りました。車は何度見てもダサイ格好ですが、中は広くてパワーもあるのです。運転手はターバンを巻いているインド系でした。どうも最初からこの部族に縁

があった様で、其の後学生寮で一番親しくなったのは同じターバン巻きのイギリス国籍のインド人（親の出身地はインドのパンジャビ）でした。この学生は数学が専攻でしたが、彼も大の日本最良でしたね。

ところで、ここ別府でこのロンドンタクシーに乗れるのをご存知ですか？この間、間違っではいけないと思って運転手さんに確かめたのですが、「はと」と「東はと」には3台本物があって運行しています。一度試しては如何？料金は一寸高いかも知れません。タイヤも国内では調達出来ないので輸入するそうです。

翌日、寮の下見に行きました。先ず Charing Cross から British Rail で Deptford まで行き、後は地図を頼りに歩きました。一寸がっかりしました。どう見ても場末の感じです。人通りも少なく、出会うのは殆ど black で、通日も何かガラシとしているのです。これは大分後になってから気が付いたのですが、日本と違って電信柱が立っていないので何か物足りなく感じた様です。Halal Butcher という看板も見られ、Muslim が多いのだなと思いました。

十分近く歩いて Rachel McMillan Hall of Residence (略称 RacMac) に到着しました。寮の入り口はガラス戸ながらとても頑丈そうで、カードがないと入れないようになっていました。まごまごしていたら運良く後に Caterer と分かる Margaret Tarplett さんが廊下を通りかかり中から開けてくれ、Bursar の Margaret O'Grady のところに連れて行ってくれました。

私の部屋はもと Sister の住んでいたところで他の学生の部屋より広く、専用のバスとトイレがついていると言います。一寸幸先がいいなと嬉しくなりました。Bursar というのは辞書では経理部長、管財部長などとなっていますが、実質的に寮長のような立場で寮の運営の全てを取

り仕切っています。このマーガレットさんには其の後も私を年寄りと思ってか、いろいろと親切にして貰いました。

翌日ホテルからタクシーで移動。何やかや詰め込んだ特大のスーツケース携行なので他の交通手段など思いもよりません。Strand から Fleet Street (新聞社街) を通り London Bridge を渡り、Surrey Quays を経て Creek Road の寮に到着しました。この場所は、ロンドンの South East 地区に当たり、従って住所の末尾に郵便番号として SE 8 3 BU の様に記されます。また、あの有名な Greenwich Observatory まで徒歩約十分で行ける所であることも分かりました。

兎に角こうして私の生まれて初めての学生寮生活が始まりました。初の夕食はハムとしつこい味の巨大なチョコレートケーキ。パンはありませんでした。

これに対し、二晩泊まった Strand の English Breakfast はシリアルにパン、ソーセージにベーコン、卵、チーズ、ジュース、コーヒー（座っていると何度も注ぎに来る。）等とたっぷりでした。ソーセージ、ベーコンが物凄く塩辛かったのを覚えています。

入寮の翌日、早速朝の6時半からちょっとしたハプニング。起きて直ぐ toilet (又はloo) へ行ったら、床が水浸しです。慌てて水槽の蓋を取り、中の水球の引っ掛かっているのを引き上げて漸く止めました。水は止まったものの、私の部屋は2階で下がキッチンなので心配になって飛んで行って、手近にいたおばさんに懸命に状況を伝えました。するとおばさんが「あれか？」と指差すのでその方向を見ると水がザーザー流れ落ちていきます。どういう神経か、全く慌てる様子がないのです。原因を調べようとした様子も全くない、兎に角理解に苦しみました

ね。朝食を済ませて部屋に戻ると Bursar 自ら掃除機様のもので水を吸い取っていました。掃除の人はその時間まだ出勤していなかった様です。

その日の入学手続きはとても時間が掛かりました。講堂の様なところで一日で新入生全員を済ませようとするのですから当然です。手続きが済むと教授陣との入学パーティー。これはちょっと珍しいとは思ったものの、長くは居られませんでした。

翌日はオリエンテーションでした。先生の呼び方とか、成績は厳しくつけるとか、図書館の使い方、授業の受け方等の説明を聞き、その後警官が来て防犯について話がありました。この警官の英語はとても聴き取り難く、口座開設に行った National Westminster Bank (通称 Nat West) の clerk と同じ Cockney だと思いました。もう大分昔になりますが、My Fair Lady という映画の中で Audrey Hepburn 扮する Eliza が The rain in Spain falls mainly in the plain. を発音する、あれですね。エイがアイと言われので today はトゥダイとなります。

実際に授業が始まると英語の授業が期待に反して週に2科目、4時間と少ないことが分かりました。ひとつは academic writing, もうひとつが Cambridge Proficiency Test の準備の為の勉強でした。確かに幾つものレポートを書かされるので単に授業時間だけではないのですが、これでは不足と思って Daily Telegraph という新聞を買い始めました。これを選んだ理由は、歴史の推薦図書の中に such respectable places as the letters pages of the Daily Telegraph という一文を発見したからです。今トイレで(すみません)上巻だけで900ページ以上もある Sherlock Holmes 全集を読んでいるのですが、そこにもこの新聞の名が何度も出て来ますか

ら、古くからある新聞なのですね。

序でに申し上げますと、この別府大学はイギリスの King Alfred's College と提携関係にあるのですが、同じ本の中で、このカレッジの所在地 Winchester を the old English capital と書いています。今から100年以上前に、ロンドンから汽車で二時間掛かることになっています。

先生の中では歴史の Dr. Kelly Boyd (女性) が思い出されます。毎回教室に CocaCola Diet の一缶を持って悠然と現われます。その英語はクリアーで聴き取り易いものでした。今でも思い出すのは彼女が机に腰を掛けて講義をした姿です。いくらフレアーのロングスカートでも脚を開いて机に腰を掛け、胡座をかく女教師は日本には居ないでしょう。レポートはなかなかいい点は取れませんでした。44点、58点、62点と徐々に上がっては行きました。

それにしてもいつも思うことですが、native の手書きは本当に読み難いですね。この先生が essay を返す時に付けてくれる handwritten の additional comment もそうでした。あと、この先生の Reading List は物凄く17ページにも亙って推薦図書が列挙されていました。とても読めるものではありません。また、この先生はレポート作成要領の中で WARNING として plagiarism (剽窃) を厳しく戒めていました。直接の引用でなくても、他人の書いたものを使う時は必ず出典を明記しなさい、ということでした。

英語のクラスは12人前後が一クラスでした。Proficiency のクラスに最初日本人の若者が一人居ましたが、途中から来なくなりました。それで男は私一人になってしまいました。よく出来るのはドイツ人でした。フランス人は訛りが強く、決して綺麗な英語ではないのですが、全く気が付いていないかのように堂々と話します。(これが日本人にはなかなか出来ません。)

面白いと思ったのは、周りの学生は皆若いのに、私の様な年齢の者にも極く自然に接して呉れたことです。日本だったらどうでしょうか。

Proficiencyの先生は春学期の途中でJaneからAngelaに変わりました。或る時このAngela先生がスペイン人学生の質問に答えて、何の準備も無いのに、イギリスの現代作家を15人位スラスラと列挙して夫々の作家の代表作品を黒板に書いたことがありました。ちょっと感心しましたね。その中に Kazuo Ishiguro の The Remains of the Day というのがあって、名前がどう考えても日本人なのではっきり記憶に残りました。そして別府大学に来てから偶々この近くの「大学通り書店」でそれを見付け、懐かしさの余り買って読みました。Ishiguro という人は長崎で1954年に生まれ、6歳でイギリスに渡り Kent と East Anglia の二つの大学を出て、作家になった様です。こういう人(日本人とは言い難い。)もいるのですね。本の内容は Butler, 執事とはどういうものかというのがテーマになっています。映画にもなって、日本では「日の名残り」というタイトルで上映された様です。

それとこの先生には Michael Swan の Practical English Usage という文法書の存在を教えて貰いました。これを紹介する時に、「皆さんの中で自分の国に帰ってから英語を教えようと思っている人には必携の書です。」と言ったのを今でも鮮明に記憶しています。Goldsmiths の中に店を出している Waterstone's という本屋(日本で言えば紀伊国屋とか丸善に当たる。)で買って帰り、今とても重宝しています。勿論英文ですが参考書としてとても使い易いですよ。

それから同じ本屋で買った Longman の Dictionary of Contemporary English も non-native 用に作られたとても良い辞書です。英和

だけではどうしてもスッキリしない時にこれを引くと、成る程と納得がいくことがよくあります。

もう一方の Harriet 先生は褒め上手でした。春学期の終わりに心からお世話になったと思って別れの挨拶をしたのはこの先生でしたね。或る時、政治学や歴史の essay を書くに当たって推薦書を読み切れなくて困るとこぼしたら「全部読む必要はないのよ。私たちだってそうよ。」と言われました。色々な事を体験しても殆ど忘れているのに、こんな一寸した会話は妙に覚えているものですね。

私にとって最も辛いクラスは政治学と人類学の tutorial でした。いずれも10人以内の学生数です。既に講義で話されたテーマについて助手の先生がリードして discussion をさせる訳です。主役は学生で皆よく喋ります。これが教授達の英語よりずっと聴き取り難い。それに内容の難しさが加わるので、正に地獄の苦しみです。自分の子どもより若い学生を前にして、何か自分の方が幼い様な気分になってしまうのがとても悔しかったですね。

人類学の tutor、Trevor 先生は最後のtutorialをちょっと早めに切り上げて、最寄りの pub で打ち上げをやって呉れました。最初一杯だけ彼の奢りでした。2時間位続きましたか。これも一寸した思い出です。

お酒はよく飲みました。独りで寂しさを癒すにはやはり酒ですよ。ビールはベルギー産の Stella Artois (Alc.5.2% vol.) が私の最も愛飲した銘柄でした。缶には Annos 1366 などと印刷してあって古くからあるビールなのだと思います。時には目先を変えてワインを飲みました。皆輸入品でイタリア、フランス、ハンガリー、ブルガリア、チリ、オーストラリアと様々でした。スペインのPort (Alc.20% vol.) も一度飲

みましたが、なかなかの味でした。

ある時こんな事がありました。いつものように自室でビールを飲んでいて、そのときに限って妙に回りが早いのです。それで缶をじっくり見ると、なんと、Alc. 9%と書いてあるではありませんか。普通のビールの倍ですから、よく効くのも道理ですよ。イギリスにはこんなものがあるのです。

又、3月17日は St.Patrick's Day とか言って、Guinness がpub で普段の44%引きで飲めると若い日本人カップルに誘われて9時半頃から出掛けました。Dog&Bell という彼等の行き付けの店でパイント (570ml) 1ポンドで大いに飲みました。この二人は、其の後 break up しましたが、私は今も別々に時々連絡を取り合っています。

さて、人類学の講義は Dr. Victoria Goddard という先生でした。この先生は教わった先生の中で最も服のセンスが良かったですね。歴史の Boyd 先生とは両極でした。この講義では参考文献14タイトルのコピーを3.5ポンドで売ります。これの予習も中身が難しくてとても苦しみました。もし人類学を取らなければ一生お目に掛からない様な英語に触れることが出来て良かったなと思います。

春学期のみで別紙 (省略) に示した様な Reading でした。どれも細かい文字がびっしりでした。兎に角必死で読んだのですが、お蔭で英国行きの直前に買った英和辞典が直ぐに手垢で真っ黒になりました。お恥ずかしいのですが、私の人生で短期間にこれだけ汚れてしまった辞書はありませんでした。

Goldsmiths で感じたことの一つは、建物の管理がとても閉鎖的だということです。本館以外の小部屋のある建物は入り口に Security Lock がついていて、それぞれの code number

を知らないと中に入れません。その番号自体も教師から口頭で知らされるのみで、一切パンフレットなどには載っていないのです。

それから、学生と教授とが面談出来る日時も office hours としてはっきり決まっています。その時以外に訪ねても、ドアはロックされていて中には入れません。多分教授の個人としての時間を守る、という考え方からそうなっているでしょう。

さてイギリス人とはどういう人達なのでしょう。私が在英中に接した人達は皆いい人達でした。大学や寮の外でも人種差別的なことを感じたことはありませんでした。下町で黒人や移民の多い地区であったからかも知れません。

外国人について安易に批判するより、好感を持って見る方がお互いに良い事ですね。然し、イギリスに惚れ込み過ぎの林望センセイとか、更に嵩じて「大人の国イギリスと子どもの国日本」などと題する本を物するマークス寿子さんは一寸腹立たしいですね。

寿子さんは Marks&Spencer というイギリスの大手小売業のオーナーと結婚して直ぐ離婚したのに未だマークスという名前を捨てないのです。Marks と名乗って居る間は Lady と呼んでもらえるからとか聞きました。実は、私はこの M&S と短い期間でしたが仕事をしたことがあります。本社が Sherlock Holmes が住んでいたことになっている Baker Street にありました。

林信吾氏はこう書いています。「要は、外国に出て、異文化の中で育って来た外国人と対等に付き合える様な日本人になるためには、外国の文化を学ぶ以前に日本文化の中に育った人間として確立した自己を持っていなければ駄目なのだ、ということである。さらに言えば、もともと立脚点の違う二つの文化を比べて優劣を論

ずるなど、馬鹿げたことではないか。」

また、高尾慶子さんは「私の心の隅にはいつもニッポンがデンと居座っていて、母国を無視したり拒絶したりしたことは一度もない。」と記しています。

黒岩徹氏はこうです。「イギリスに移り住んだ場合、隣人と親しくするには、最低3年かかる、と言った人がいる。」「エキセントリックな男といわれる人物がイギリスにはよくいる。だが eccentric という形容詞には、けっして非難や軽蔑の語感はない。むしろ風変わりでいられる人物への感嘆、賞賛、憧憬の気持が込められている。」「古さの中にきらめく価値を見つけ出し、これを守ることこそ自分の人生の意義と見る心根である。」

何れも、長くイギリスに暮らし、幅広くイギリス人と接した人達だけにいい言葉ですね。

次に、ユネスコという国際機関で22年間勤め、今は帰国してユネスコ事務総長顧問と麗澤大学教授をつとめる服部英二氏は「自らの文化的アイデンティティーを失ってはならない。外国では、これのない人は尊敬されない。」と話していました。

国際理解流行で相手国を理解することの重要性が叫ばれる余り、自分を卑下したり、自分の生まれた国、この日本を軽んずる傾向はないでしょうか。又、最近英語の早期教育が声高に叫ばれていますが、英語の前に国語の教育は大丈夫なのでしょうか。

では、イギリス人自身は自分をどう見ているのでしょうか。P. S. Tregidgo という大学教授は、イギリス人の特質をよく示す言葉として“reserve”を挙げ、①A reserved person does not talk very much to strangers. ②does not show much emotion. ③seldom gets excited. と言います。そしてイギリスでは、④loud

speech is considered ill-bred. ⑤self-praise is felt ill-bred. ⑥This self-depreciation is typically English. だそうです。

またユーモラスに自国を評する Giles Murray 氏はこう言います。

As former empire-builders they certainly were accustomed to bullying foreigners, but hardly to dealing with them on equal terms. 又、Why are the British so individualistic? という見出しで、As a nation the British therefore long ago came to the civilized conclusion that life was not for performing big, heroic deeds, but for enjoying oneself in one's own private little way. とも言っています。

次に会田雄次先生の「アーロン収容所」(1962年刊)では、戦争直後の異常な状況下と言いながら、全く我々の知らないイギリス人の姿が描かれています。これを読むと、なぜイギリスがアジアやアフリカの多くの国で植民地を維持出来たのかのヒントが分かる様に思います。一つだけ紹介します。

会田さんは捕虜としてイギリスの女兵士の部屋の掃除をやらされていたそうですが、ある時部屋に入って行ったら女が全裸で髪を解かしていた。一寸振り向いたが日本人捕虜と分かると、其の俛平然と髪を解き続けた。この時の会田先生の心理分析は、「要するに人間と見做していないのだ」というものでした。

話題を変えましょう。イギリスの天候はと言うと、時々激しい時があります。ある人は「一日の中に一年分の天気がある。」と評しています。大学から寮まで僅か20分余り歩く間に、レインコートの襟から靴の底までズブ濡れになったことがあります。雨が殆ど水平に吹き付けるので、傘は全く用をなさないので。靴の中までグショグショになるというのは生まれて初め



てでした。寮に帰って下着から何から全部着替えた頃にはもう素晴らしい宵空になっていました。1月19日も同じでした。3月28日になって春の淡雪が降りました。

新聞の天気予報を読んで収集した天気関連の英語を資料(省略)に入れておきました。後でご覧下さい。

食事に関して私はイギリスに行く前に予め決めていたことがあります。在英中に自分で料理を絶対作らず、悪名高い英国料理だけで暮らそうと。結果、寮の canteen で出るものでは baked beans, 大学の refectory ではサラダバーが気に入りました。

困るのは土、日の二日間です。寮の食事は一切出ないので、朝から晩まで自分で何とかしなければならぬのです。朝は主にコーンフレークにミルク、コーヒーとフルーツでした。後の二回はもう少し実のあるものを用いることで、レストラン、take away の fish&chips やチキン屋を利用したり、肉屋でハムを買ってきてパンと一緒に食べたり、時には filling station でサンドイッチを買ったりしていました。

レストランで最も頻繁に行ったのは Greenwich のベトナム料理店で、そこで中華風のもの食べていました。途中から Deptford 駅の直ぐ近くに新しく出来た若い中国人夫婦がやっている中華屋へ行くことが多くなりました。店の名は「好友」Good Friends でした。

どうしても日本食が食べたくなると、セントラルの tube の Bond Street 駅から直ぐの South Molton St. にある「嵯峨」へ行きました。値段は安いとは言えないのですが、あのサントリーの経営する「燦鳥」などに比べたら格安でした。

それから日本への帰国間近かになって初めてサーロインステーキというのを Greenwich の

レストランで頼んでみました。これはひどかったです。真っ黒で、tough で、ソースもついていない。仕方なく塩をかけて食べました。不味いのはかなり慣れた積もりでしたが、これは最悪でした。

tube と言えば地下鉄のことですが、実際に地下のホームに降りて電車が入って来るのを見ると何故そう言うかよく分かります。電車も線路の上の天井も丸くて正にチューブ状なのです。日本と違ってアナウンスは全くと言っていい程ありません。私が唯一聞いたのは Mind the gap. というものでした。電車とホームの間に隙間があるから気を付けろ、と言う訳です。

tube は初めて乗る人でも案内表示(少ないが、無駄がない。)を慌てずにしっかり見て動けば、目的地へ間違わずに行ける様になっています。駅で Journey Planner という路線図を貰うともっと分かり易くなります。tube では出口は Exit でなく Way Out という標示になっています。

バスはよく目的の停留所辺りの様子を知っていないと利用し難いです。電車と同じでアナウンスはありません。分からない時は運転手に乗った時に予め頼んでおけばよいと観光案内には書いてありますが、なかなか気軽に英語で頼めるものではありません。だから地下鉄の主要駅などで Central London Bus Guide を貰って予め調べてから行くのが安全ですね。

バスに乗り込むとすぐ、目的の停留所の名前を言って料金を払い、切符を貰うのですが、この時は意識的にアクセントを大袈裟と思える程強くつけた方がいいです。日本人はどうしても日本語と同じ様に平板に発音する癖があるので、相手からするとよく分からないことがある様です。現に私も Elephant Castle と言っているのに怪訝な顔をされて、慌てて言い直したこと

がありました。

Request Stop という言葉はご存知でしょうか？ ロンドンでは、バスが近づいて来たら腕を突き出して、運転手に、自分はバスに乗りたいたんだ、という意志表示をしないと、止まらずに行ってしまいますから気を付けて下さい。

Deptford の High Street という一応、大通りでは、土曜日に露天商が沢山店を出し、あらゆる品物が並べられます。その中で果物屋と野菜屋は割と利用しました。段々と分かったことですが、lettuce という言葉があるのに iceberg と言うし、Okra もありました。オクラは日本のものより数倍ビッグで見ると固そうでした。先ほど言った様に、私は調理をしなかったのでは味は分かりません。

この市の古着屋には一つ思い出があります。実は長く愛用した Aquascutum のコートが大分へたって来ていたので、土産の一つに新しいのを買う予定にしていました。考えたのは古い方の処分です。思案の揚げ句、前から目をつけていた古着屋のおじさんのところへ持って行って売って貰うことにしました。勿論捨てる代わりに持って行ったのですから、タダで渡しました。すると「じゃあここに掛けておこう。売れたら来週知らせるよ。」てなことを言って、早速吊るしていました。そして私が薬局と中華の昼飯を済まして一時間程してさっきの場所に通り掛かり、見るともうありません。おじさんと視線があっても知らん顔です。取えて確かめることはしませんでした。果たしてどうなったのでしょうか。まあ、あの地域では直ぐに売れても不思議はないし、おじさんが自分用にしてもおかしくはないと思いましたね。

ここで一寸した英語表現を二つ。皆さんは cheers と人から言われたら何だと思いませんか。乾杯の音頭用だけではないのです。日本語の軽

い感謝の言葉「どうも」に当たります。例えば、前を歩いていた人が先にドアを開けて、続いて入って行く自分の為にドアをおさえていてくれたら、Cheers とやって下さい。次に lovely という言葉がありますね。寮での昼食でお金を払った時これを言われてエッと思いました。私は絶対に lovely ではないから。実は、その時私はお釣りの要らない様にきっかりの金額を払ったのです。それでこう言われた様です。住んでみないとこんな英語は聞けませんね。

前にも言った様に新聞は Daily Telegraph を読んでいましたが、紙面の使い方で印象に残ったのは、Obituary という著名人の追悼記事に殆ど一面を費やして短い伝記の様なものを載せることでした。イギリスの新聞については前出の Murray 氏による紹介を資料（省略）の方でご覧下さい。Daily Telegraph については At the top there are the so-called quality papers like the right-wing Daily Telegraph …と紹介していますから、右翼系のまともな新聞を読んでいたことになります。

さてロンドンと言えば観光ですね。私の場合、昔の仕事での出張の時も現地の人気が遣って観光に誘っても殆ど、「興味がないので」と言って断っていました。どうも観光名所へ行っても余り感動がないのです。とは言っても、昔行ったブラジルのイグアスの滝とか、イギリスの Lake District, British Museum ではそれなりの感動はありました。大英博物館では、よくもこんなに沢山よその国の物を持って来たものだな、という驚きです。

帰国の直前、息子が卒業記念と称してロンドンへ来た時は Waterloo から電車で Wimbledon を経て Hampton Court に行きました。しかしそれまでは英語に必死で気持の余裕がありませんでした。そんな訳で、何も見ていないのです

が、クリスマスに家内と娘が激励にやって来た時に ballet を二つ見ました、というより、見させられました。Trafalger Square 近くの Coliseum で Nut Cracker を、Covent Garden の Royal Opera House で Cinderella を見ました。シンデレラでは日本人のプリマが上演日によっては交替で踊っていた様です。確か吉田さんですが、この人は私が日本に帰ってからNHKテレビでその活躍振りが紹介されていました。

さて、ぼつぼつ時間ですので wrap - up に入りたいと思います。

今私は自分の留学経験と其の後の別府大学での4年近い教師経験を踏まえて、次の様なことを考えています。

- ① イギリスでの勉強は正直言って苦しみでした。必死に英語を勉強したのみでした。然し苦しんだお蔭で勉強になり、その結果今があるのであって、その意味で有意義な留学であったと思います。
- ② 留学はやはり若い時がいい。元気もあるし、友達も出来やすい。しかし若過ぎてもいけない。やはり日本人としての identity を確立してからがいい。つまり大学生以上がいい。
- ③ 出来れば留学中に diploma を取って来たい。その為には一先ず Foundation Course に入って一年間英語及び Christianity などの教養科目をみっちり学びたい。
- ④ 英語の力においてヨーロッパ人が羨ましかった。やはり日本人が英語を覚える苦勞とは大分違う。語順が違うこと一つを考えても困難さが全く違う。
- ⑤ だから、日本語を学んだことのない外国人は日本人の英語下手に対して理解がないと思う。中には日本人をひそかに馬鹿にしている外国人もいる。(本学にはそういう外国人はいま

せん。)

⑥ 特に、日本に来て何年経っても母国語しか話さない外国人に対しては私達も接し方を考えた方がよい。日本人が外国へ行く場合、ずっと日本語で通そうなどと図々しいことは考えませんね。

⑦ よく考えてみると、英語国の人が英語を話せるのは、私達が日本語を話せるのと何ら変わりないですね。だから、英語が話せるだけでは何も尊敬に値しない。この当たり前のことに案外気が付かず、情けないことに妙に気後れを感じたり、分不相応な敬意を表してしまうのが、多くの日本人の傾向ではないでしょうか。英語を喋れることを差し引いても、未だその他の点で尊敬出来たり、魅力を感じる人こそ我々が親しくしたい外国人ですね。

⑧ 国際理解とは、相手を理解することだけに必死になり、只管相手に合わせようとするのではなく、双方向に、相手に自分の考えや主張を理解させ、そして、日本という国を知ってもらうことだと思うのです。

⑨ だから、APUに沢山外国人が来るからといって、別府のあちこちで英語を覚えようとしているのは、ちょっとおかしいですね。この別府で心地良く住み、学ぶ為にいろいろ努力すべきなのは彼等の方であって、決して我々の方ではないのです。彼等が日本語を覚え、日本をより深く知ろうとする努力に対しては出来るだけ協力したいものです。

⑩ そして、別府へ来る留学生には先ず日本語を覚えて帰って貰いましょう。そうでなければ日本に来た意味がないではありませんか。

皆さん長時間私の話にお付き合い下さって有り難うございました。これで終わります。